# 「オンネパシクル」について

大谷洋一

## 一、はじめに

北海道沙流郡門別町で、大正時代に生まれ育った女性三人から、口頭文芸を採録する機会を得た。そのうちの一人、松島トミは「ふたつしか覚えていない」と言われていたのだが、幼なじみとの会話がはずむと短い伝承を思い出された。それは「onne paskur ine?(老いたカラスはどうした)」という言葉で始まり「Aはどうした」「Bになった」「Bはどうした」「Cになった」と、節にのせて問答を繰り返すものであった。

今までは、この物語の呼び名を「uparpakte(口くらべ)」と呼称し、「早口に、交互に問答を競い、負けたら罰がある」という説明がされていることが多いのだが、筆者の現地調査では必ずしもそうではない。そこで、過去の研究成果に、筆者が新たに採録した資料を加えて再検討してみたい。

今回取り上げる口頭文芸の語りはじめの文句は、ほとんど「onne paskur ine?」という言葉なので、本稿では「onne paskur」を仮の標題としてすすめることにする。

## 二、テキストの一覧

現在のところ、onne paskur のアイヌ語原文はわずかな量しか採録・刊行されていない。アイヌ語を除いた日本語訳だけ、あるいはその断片だけを報告している資料は特に一覧しない。(1)

資料1　一九二四　『アイヌの足跡』眞正堂　満岡　伸一

資料2　一九三七　『アイヌ民俗研究資料　第二(謎・口遊び・唄)』(『アチックミューゼアム彙報第17』　東京)　知里真志保

資料3　一九六五　『アイヌ伝統音楽』日本放送協会編　更科源蔵他(2)

資料4　一九六八　『旭川郷土博物館研究報告　第5号』市立旭川郷土博物館(現旭川市博物館)　松井恒幸・其田良雄

資料5　一九八二　『昭和56年度　アイヌ民俗文化財調査報告書(口承文芸シリーズⅠ)』北海道教育委員会　萩中　美枝

資料6　一九八七　『国立民族学博物館研究報告別冊　5号』国立

民俗学博物館　村崎恭子他

資料7　一九八七　『昭和62年度　アイヌ民俗文化財調査報告書』北海道教育委　員会　佐藤　知巳

資料8　一九八八　『昭和63年度　アイヌ民俗文化財調査報告書』北海道教育委　員会　佐藤　知巳

資料9　一九八八　『アイヌ語音声資料　5』早稲田大学語学教育研究所　田村すず子

資料10　一九九五　『静内地方の伝承V―織田ステノの口承文芸(5)―』静内町教　育委員会　奥田統己他

資料11　一九九五　『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要　第1号』　北海道立アイヌ民族文化研究センター　大谷　洋一

資料12　『吉田巌遺稿資料　148』北海道立図書館（文献番号2470）

平取町出身の萱野円次郎が書き残したものである。他にも2編の onne paskur があるが、採録地や採録年月日は記されていない。原本は帯広市図書館に収蔵されており、現在「吉田巌資料編集委員会」によって整理作業が進められている。

資料13　『金田一京助採録ユーカラ・ノート』北海道立図書館（文献番号2904）

北海道立図書館所蔵の複写資料（マイクロフィルム請求番号HM417金田一13）

資料14　『知里ノート』北海道立図書館（文献番号2859）

北海道立図書館所蔵の複写資料（マイクロフィルム請求番号ア・92-C）『金成マツ（アイヌの歌謡）シノッチャ～知里ノート～』（複写製本）でも見ることができる。

資料15　『更科源蔵氏資料』北海道開拓記念館（収蔵番号89628）

資料16　一九九一　『母と子のアイヌ語教室』

関東ウタリ会主催のアイヌ語教室で用いられた資料。

資料17　『北海道立アイヌ民族文化研究センター音声資料』（収蔵番号 YO-01）1994年と1995年、平取町、鵡川町、門別町において筆者が採録する。

資料4と資料5は、伝承者の知里幸恵が筆録したノートを元にして発表したものである。まぎらわしいことであるが、ふたつのノートは共に通称『知里幸恵ノート』と呼ばれている。同じ話が収められているが、アイヌ語の言い回しに多少の違いがある。

## 三、onne paskur の採録地

前述した資料から図1を概観すると、胆振・日高地方で採録されたものが多い。他の地域では、採録調査があまり行われていない。（番号は資料番号と対応しているが、△印は原文の確認ができなかった）唯一、更科源蔵が「全道各地にある」として、網走、釧路、十勝地方の採録地名をあげている。その中で、アイヌ語原文資料の存在を確認できたのは、十勝地方清水町出身で生活体験地が芽室町の

伝承者が語った音声資料のみである。今後の調査で、アイヌ語原文資料が出てくる可能性もある。伝承者の出身地と生活体験地がほぼ重なっているので、図1は採録地が伝承地として見ることが可能である。

幌別で生まれた知里幸恵は六才の時に旭川の近文に移り住んだが、同居していた祖母の金成モナシウクや養母の金成マツ（一八才まで幌別に在住）が幌別生まれであること[3]、知里幸恵と金成マツが別の場所と年代に書き残したにも関わらず onne paskur のあらすじが同じであることから、知里幸恵は幌別伝承の onne paskur を書き残したと思われる。あるいは、幌別と旭川の伝承が同じあらすじであったと考えられなくもないが、知里幸恵が書き残した多くの伝承の中で onne paskur だけが旭川のものと考える方が不自然ではないだろうか。このような問題は、旭川出身の語り手から、伝承先が明確なテキストを採録しなければ解決しない。

## 四、onne paskur のあらすじ

onne paskur は問答形式で展開しており、会話の文句以外に挿入される言葉はない。質問とそれに対する回答を一組の項目と考えると、一九項目の問答が展開される資料4が最も長い[4]。それは、以下のような流れで展開するが、全ての原文資料を項目ごとに並べると、様々な存在に変化を続けて結末を迎える。表1に示してあるのは、その結末の状態により分けた七つの型である。なお、始まり文句の「onne paskur」（年寄りカラス）は、「ワタリガラス」を意味する場合もあるが、筆者が会った伝承者に「ワタリガラス」を思い浮かべた人はいない。

資料4

年寄り烏は何うした？　麹を取りに行った。
其の麹は何うした？　酒を造ってしまった。
其の酒は何うした？　飲んでしまった。
飲んだのはどうした？　糞に出してしまった。
その糞は何うした？　犬が喰ってしまった。
其の犬は何うした？　殺してしまった。
殺したのは何うした？　からすが食ってしまった。
其のからすは何うした？　殺してしまった。
殺したのは何うした？　矢に作ってしまった。（羽で）
其の矢は何うした？　（それで）樹を射ってしまった。
其の木は何うした？　伐ってしまった。
きったのを何うした？　火にくべてしまった。
火にくべたのは？　おきになってしまった。
其のおきは何うした？　白い灰（おきの上にできる白いの）になってしまった。
其の白い灰は何うした？　あくになってしまった。
其の灰は何うした？　爐中を片附けて、捨ててしまった。
捨てたのは何うした？　苔になってしまった。

其の苔は何うした？　舟につくってしまった
其の舟は何うした？　見える所と見えない所との間へ流れてしまった。

資料15
老いたカラスどうした？　俵を取りに行ってしまった。
その俵はどうした？　穴があいて、お米が俵から全部こぼれ出てしまった。

逆に資料15はたった二つの項目で終わる最も短い問答である。これは、「語り手が若い頃は、kamuy yukar や uepeker は多く聞かされていたが、遊び唄はあまりやらなかった」ということである。語りはじめの文句だけ覚えていて、その後に続く文句を思い出せず、直ちに話の結末に導いたのかもしれないということも考えられる。[5]

アイヌ語は、動詞や名詞に誰の行動や所有物なのかを示す人称接辞が付く言葉である。表1の項目4や7に見られるように、用いられている人称接辞は伝承地域によって違いがある。語頭に付いている a=, an=, ci= などであるが、a=, an= は方言差であり「①（話相手を含む）われわれが、の　②（女性から成人男性へ）あなたが、の　③（引用文、物語中の）私が、の　④（不特定の）人が、の」などの広い意味を持ち、どの意味を持たされているかは文脈から判断するしかない。伝承者ごとに、①③④の中から人称接辞を選択して語っているが、原文資料を見ているだけでは判断がつかない。one paskur を語り終えたあとに、伝承者が内容を説明する言葉からくみ取っていくしかないのである。

用法において異なる人称接辞 ci= は、「（話相手を含まない）われわれが、の」「（kamuy yukar の中で）私が、の」などの意味を持ち、より確実に誰の行動・所有物かを示す単語である。また、「殺す」という動詞は、単数の rayke と複数の ronnu があり、伝承地によって用いている単語が異なっている。門別町伝承の資料11は、人称接辞が ci=, 動詞が ronnu を用いており、キツネを意味する ci-ronnu-p「我らが-殺す-もの」と似た音になったため引き起こしたあらすじの変容であろう。資料12は同じ人称接辞 ci= を用いているが、動詞に rayke を用いているため変容を起こしていない。

資料10では、一つ目と二つ目の項目がまとめられ「こうじをくわえたカラス」になっているし、他の資料にある項目8、9がついていない。ここは、他のテキストで「カラスの羽で矢羽をつくる」ことになっているが、実際の狩猟ではカラスの羽を使ってはいけないという沙流川筋の報告がある。[6]

全体のあらすじを見渡すと、語りはじめの文句 onne paskur「年寄りカラス」を起点としていろいろな存在に変身を続ける。最終的には、「矢羽根草」「福寿草」などの植物や「黒い雲」などの発生の由来話と、「山津波」「津波」「嵐」などにまきこまれて視界から消えて言いようがなくなる消滅の由来話に大きく分けられる。

資料11の伝承者松島トミに三度語ってもらったところ、三度とも言い回しに微妙な違いがある。そこで、語り手自らが筆録したノートを元にした資料を比較する。資料4と5は、知里幸恵が同じ年に筆録している。資料4の会話項目は19あるが、資料5では「おきになってしまった。其のおきは何うした?」の文句が抜けて一行少ない。日本語訳を見た限りでは、原文の語形の違いはわからないのだが、アイヌ語原文の四項目に言葉の置き換えがある。たとえば、結末部分のアイヌ語原文だけでも、次のような言い回しの違いがある。

資料4

ne chip ine?　　其の舟は何うした?

anukari ne wa somo anukari　　見える所と見えない所との

ukouturke un mom wa isam!!!　　間へ流れてしまった!!!

資料5

ne chip ine?　　その舟は?

shir wen wa　　お天気がわるくなって

toop Anukari ne wa　　ずうっと、見えるところと

somo anukari　　見えない

uturuhu oshma wa isam.　　間に入ってしまった

これは、よく私どもの小さい時分に問答したものです。出来るだけ口早に問ふものも答へる者も、まごつかないやうに気をつけていふのです。そして間違った者はひどい目にあはされます。

これは、資料5の末尾にある知里幸恵のメモである。知里幸恵のいう「間違い」とは、単語の置き換えのことではなく、前後のつじつまの合わない文句を言った場合を指していると思われる。

## 五、研究者のつけた標題と演じ方の報告

onne paskur について、研究者がどのようにアイヌ語の標題や演じ方を記録して報告してきたのだろうか。それらの記述がある各資料を古い順に見ていこう。

一九二一年の夏、金田一京助は知里幸恵から onne paskur を記したノートを受け取っているが標題はつけられていない。それが資料5になっている。

同年一二月、鍋澤コポアヌから採録したノートが資料13である。標題が「ramusuye（ダマス）」とあり、その上部にも「コドモダマシニイウモノナ□□」と書きこまれている。これは、子供に対して「なだめる」「あやす」「すかす」という意味があり、研究者が記録した初めてのアイヌ語標題である。しかし、金田一はこれを特に発表することはなかった。

一九二一年の冬は、知里幸恵の母校の教師であった佐々木長左衛門も知里幸恵から原文対訳ノートを受け取り、対訳だけを記載した

本を発行している。[7] その際、佐々木は原文ノートに記されていない標題を「イタク、ウコラムヌカラ itak ukoramnukar(智恵くらべ)」とつけ加えている。「イタク」は「話す」という自動詞であるから「言葉、知恵くらべ」という意味になる。ここのアイヌ語ローマ字表記は母音の有無を正確に書きわけてある。当時、この表記を正確にしていたのは、伝承者として自ら筆録する知里幸恵だけである。金田一は知里幸恵に出会ってそのことに気づくことになる。その金田一が佐々木の本に序文を寄稿している関係上、標題を伝えたとしたら、資料13と同じ「ramusuye(ダマス)」になっていたはずである。おそらく佐々木は出版する段になって、標題としてアイヌ語でどう言ったらよいのか知里幸恵に考えてもらったのではないだろうか。刊行物に書かれた最初のアイヌ語標題が「itak ukoramnukar」である。

それから一五年後、知里幸恵の弟である知里真志保が資料2を発表しており、onne paskur の標題と口演方法を簡潔に述べている。[8]

> u-par-pakte は「口くらべ」の意味である。これをできるだけ早口に、間違はずに問答するのが眼目である。間違えば相手に「しつぺいをはられる」(a-hampetokkar)。

この説明の情報入手先は、はっきり分からないのだが、アイヌ語原文と標題については金成マツの筆録した資料14によると思われる。資料2と資料14は、様々なジャンルの口頭文芸がほとんど同じ内容と順序で並んでいる。資料14の目次と本文の冒頭に伝承者自身が標題を記している。目次は onne paskur、本文の上部余白には uparpakte とあり一定していない。しかも、uparpakte の文字は本文に比べて角度が違い、文字も細いため、後から書き足したようでもある。特に注目するのは、金成マツは知里幸恵と長く同居していたにも関わらず、お互いに異なるアイヌ語標題を研究者に伝えていたということである。以上のことから、onne paskur の標題については、金成マツ自身が確定した呼び名を持っていなかったのではないかと推測する。

資料3には、更科源蔵がアイヌ語原文と解説、楽譜を載せているが、アイヌ語の文字化に誤りが見られる。そして、「東静内地区」で採録したものに対して、楽譜は「onne paskur ine」、アイヌ語原文には「口くらべ(upar pakte)」と標題をつけており、説明は次の通りである。

> これも子供に記憶や雄弁の力をつけるためにやらした遊び歌と思われ、全道各地にあるものである。元来は二人でできるだけ早口に、そして間違いはないように問答するので、間違うと墨をつけられたり、いやなことをさせられたり、シッペをはられたりした。収録したこの歌は多少記憶が失われかけている。知里真志保博士の『アイヌ民俗研究資料』にあるのがこの原型と思われる。

『アイヌの童戯　更科源蔵アイヌ関係著作集Ⅷ』（一九八三）には、アイヌ語原文をはずしているが、興味深い記述も含まれている。

日高の静内辺ではこれを特別に、ウパルパッテ（互いに口を計る）と呼んで、二人が向かい合って、すらすらと間違いなく早く、問答するもので、忘れたりすると顔に墨をつけられたり、シッペをはられたりした。

知里真志保の uparpakte という標題の情報入手先は幌別であるのだが、更科源蔵は静内でも呼んでいるという。そして、東静内、北見美幌、阿寒、十勝の芽室で採録したものを、「どれも子供の智能や能弁のためのウパル・パッテであったものである」と結んでいる。しかし、「口」を意味する単語は、一般的に北海道の西側で「par パル」、東側で「car チャル」と言われている。[9] 静内では、この単語が混在しているのだが、それより東側のチャル系地域においても、パル を含む単語が用いられていたとするならば、onne paskur は西から東へ伝達したと考えることも可能である。おおいに関心を引くところであるが、両著とも知里真志保からの引用で補強されていると思われ、どこからどこまでが更科自身の知り得た情報なのか判然としない。

たとえば、知里真志保が『アイヌの民話と唄』の注解で「upar pakte（口くらべ）」と書いてから五年後、更科は資料3において「口くらべ（upar pakte）」と前後をひっくり返して書き、それ以降も隙間の部分に中点をいれるような書き方になる。upar と pakte に隙間を空ける意味はほとんどないのであるが、更科は忠実に知里真志保の表記に従っている。また、資料15では、更科と伝承者がこの文芸を uparpakte と呼ばずに onne paskur と呼ぶのを聞くことができる。更科の報告にある uparpakte の呼び名は、どの伝承者から得た情報なのか不明である。ただ単に知里真志保の報告を引用しているだけであるかもしれな 。

資料4は、佐々木長左衛門が知里幸恵から受け取ったノートの報告である。ここには、原文ノートに記されていない標題がついている。佐々木長左衛門の『アイヌの話』と同じ標題の「イタク・ウコラムヌカラ」が載っている。

一九八二年、萩中美枝が金田一京助の発表していなかった知里幸恵ノートを報告したのが資料5である。ノートに記された様々な口頭文芸の中で、onne paskur だけは標題がつけられていなかったので、「2・題名が記されていないが、ウパラパッテ uparpakte（口くらべ）」と解題の中で、伝承者がつけたものでないことを明らかにしている。口演の形態については、知里幸恵のメモを紹介しながら「複数で演じる」「できるだけ早口にする」「間違うと罰がある」の三点を上げて特徴づけている。同様の説明が萩中によって、一九八五『月刊言語　2月号』にも繰り返し述べられている。

資料9の中で、田村すず子は onne paskur の類話も記載しながら、共に「uparpakte と呼ばれる種類の言葉遊び歌である」として、「ふたり（の子供）が、1行ずつ交互に言って言葉をたたかわせ、

対抗する言葉の言えなくなったほうが負けになるという」と説明している。しかし、この説明は伝承者から直接聞いたものではないということである。伝承者自身は、pon kamuyukar「小さな神謡」と呼んでいると記述している。田村すず子の報告が、他の研究者と違うのは、「早口にする」「罰がある」という二点について触れていないことである。

資料10では、onne paskur を語り終えた直後の伝承者の言葉が一部記載されている。それによると、これは「(takne) kamuyukar (短い) 神謡」である。報告者の標題も「カムイユカラ 10」とある。

資料11は筆者の報告であり「語り手の呼称法を用いている」として、「onne paskur 年寄りカラス」と標題をつけた。

これまでの研究者の記録や発表をみると、onne paskur には、「ramusuye 子供だまし」「itak ukoramukar (言葉) 智恵くらべ」「uparpakte 口くらべ」「(pon) kamuykar (小さな) 神謡」「(takne) kamuyukar(短い)神謡」「onne paskur 老いたカラス」など、六つの呼称が出てくる。

その中で、言語学者として知里真志保が報告した uparpakte という標題と演じ方の報告は、後発の研究者に多いに影響を与えているらしく、知里真志保亡き後の三十六年間は、この標題だけが広く知られていたのである。演じる方法も、その呼び名とセットになって「早口に、二人で交互に問答し、間違えたら罰がある」という三つの要素をあげる研究者が多い状況である。

しかしながら、「二人で問答」して「言い間違える」「言い忘れる」などの行為があれば負けになるのなら、「固定された言い回し」を目指す口頭文芸ということになる。原文と違う文句を挿入できないのであれば、二人の話し手が質問者か回答者のどちらかの役割を選んだ時点で「負け役」も決定する。全ての資料の結末を一覧すると、「対抗する言葉」を言わないのは質問者であり、必然的に「負け役」になってしまうのである。回答者が言い損じない限り、質問者は「顔に墨をぬられたり、シッペをはられたりする」のを覚悟して演じなければならない。また、負けないように互いに競うのが目的ならば、体力のある限り延々と続けることも可能であるが、onne paskur は極めて短い話として伝承されている。前述した報告は過去のものほど、矛盾を抱えている説明であると言わざるを得ない。伝承者の onne paskur は、まったく同じ言葉を固定して語るのではなく、同意語で語られる点は他のジャンルの口頭文芸と同様である。過去の研究者が述べていた「言い間違い」とは、どの現象を指しているのか説明不足であることは明らかである。

## 六、現在の伝承者の認識

もっともポピュラーになった uparpakte の標題は、一九三二年に初めて記録された呼び名である。この時期は、現在の伝承者が実際に演じていた時代であるから時間的なズレは生じていない。今一度、語り手の認識を聞いてみる。従来の研究者が述べる「早口」

「交互に問答」「間違えたら罰」という三点の要素についても質問してみた。その回答の要約を掲げておきたい。末尾（　）内は、出身地、氏名、生年であるが、語り手の希望により記していないものもある。

（ア）子供の頃、近所の年寄りに聞かされた。誰かと競い合うことはしないで、一人で歌っていた。早口で言うものでない。道を歩く時の鼻歌みたいなもんだ。カバリコタンの婆なら、みんな知っていた。子供だましみたいなもんだ。kamuyukar とは違う。呼び名なんかないんでないか。onne paskur って言えばわかる。（門別町、松島トミ、一九二二年）

（イ）（松島トミの onne paskur を聞いた直後、「cape 猫」に置き換えて歌う）子供の頃に聞かされる。一人でやる。早口にやらない。罰もない。呼び名は別にない。（門別町、厚別ナミ、一九一九年）

（ウ）誰でも知っていた。子供が集まったときにやるけど、一人で最後まで言いきり、順番にやった。早口にやらないし罰もない。二、三種類の言い方があったようだ。呼び名は別にない。（門別町、鍋澤キリ、一九二一年）

（エ）一五、六才の頃、孫じいさんの家に遊びに行ったら、焚き火の前で聞いた。退屈させないつもりで聞かせた。呼び名はわからない。一人でやる。早口でやらないし、罰もない。（新井田セイノ、鵡川町、一九一五年）

（オ）火の端で、夜なんにもないから「uenewsar（楽しむためのよもやま話）して聞かせる」と言ってから始めた。昔はテレビもラジオもないんだから。早口も罰も交互に言うこともない。kamuyukar でもないし、呼び名は特にない。（平取町、一九一〇年代）

（カ）フチ（祖母）から五、六才の頃聞かされた。誰かとやりとりするものではない。一度言ったら、最後まで一人で言うものだ。kamuyyukar でもない。節が大事だから、menokoyukar（女の神謡）だな。フチ（おばあさん）三、四人集まったら、いろいろやっていたときのひとつ。早口にやらないし、罰もない。（平取町、黒川セツ、一九二六年）

（キ）小さい頃、妹と交互に問答したけど、早口に言わない。罰もない。短いkamuyyukar だな。（平取町、一九二〇年頃?）

（ク）孫ばあさんから、七、八才の頃、子守歌代わりに聞いた。kamuyyukar ではない。ionnokka（子守歌）みたいなことだ。一人でやる。早口にやらない。罰もない。口くらべだね。（平取町、木幡サチ子）

（ケ）孫ばあさんから聞いた。kamuyyukar だ。一人でやる。早口にやらないし、罰もない。（平取町、川越トシ子、一九三四年）

交互に演じたという伝承者の証言がかろうじて（キ）にあるが、呼称として uparpakte という単語は聞かれない。従来の報告にあった「uparpakte（口くらべ）」「ukoramnukar（知恵くらべ）」

「ramusuye（子供をあやす）」という呼び名を聞かせたが、onne paskur を連想する伝承者は一人もいないのである。

伝承者の松島トミは「uparpakte は caranke（討論する）と同じ意味でないか」とも言っているので、これらの単語がもっと広い意味を持っており、ひとつの文芸を指しているのではないのがわかる。何を用いて、uparpakte をするかということになる。これらの動詞の意味する行動をとるためのひとつの手段として、onne paskur を演じるのである。伝承者が研究者に伝えた「口くらべする」「知恵くらべする」「子供をあやす」という意味の呼び名は、onne paskur を演じる各伝承者の語る目的を述べた自動詞にすぎない。

一方、kamuyyukar と呼ぶ伝承者はあらすじに様々な神が登場しているのでそう呼ぶ場合と、物語の中で二人の神が問答しているとする資料10の場合がある。その「問答」については、二通りの考え方ができる。「問答しているのは物語中の二人の人物（または神）」であるという多くの伝承者の認識と、「実際の話し手が二人いて問答する」という知里幸恵に代表される認識である。伝承者がどちらの意味で呼んでいるのか区別しなければならない。

知里真志保などによって kamuyyukar（神謡）に必須の条件といわれる sakehe[10]（リフレイン）は onne paskur には存在しない。pon（小さい）kamuyukar とか takne（短い）kamuyyukar と呼ぶ伝承者もおり、sakehe が付かなくても kamuyyukar の範疇に含める伝承者もいる。アイヌの口頭文芸をジャンル分類する上で一考を要する証言であろう。

## 七、おわりに

研究者の視線が長大かつ雄大な文芸に向いているとき、このような短い口頭文芸の研究は取り残されていた感がある。本稿では、onne paskur（老いたカラス）を語りはじめとする問答話が、従来から uparpakte（口くらべ）という呼び名で説明されていることに疑問を持ったことに端を発している。まるでひとつの文芸ジャンルの呼称であるかのような錯覚さえ起こしかねないほどである。しかし、これまでみてきたように、onne paskur は伝承者ごとに呼称と演じ方が異なる場合もある。uparpakte の呼称は金成マツがつけた呼び名であるらしいこと、その口演の形態は知里幸恵の残したノートのメモや言語学者である知里真志保の報告が引用されているらしいことなど、登別市幌別出身の三人に頼られていたのである。そして、それが昔から確立していた呼び名ではないことは、一緒に暮らしていた者が別々の呼称を研究者に伝えたという事実で明らかである。研究者の情報入手先や報告の過程を再検討すれば、一地域の呼び名や口演の状況にすぎないことが判明している。さらにつけ加えれば、同一の口頭文芸であっても伝承者の語る目的が異なれば、その目的に応じた複数の呼称が生じる点を指摘しておきたい。

一部の伝承者や研究者が述べることを引用し続けて全体を語るのでは、アイヌの口頭文芸の本質はいつまでも見えてこない。ひとつの文芸について分析するために必要なのは、多くの伝承者自身が説明する言葉をデーターとして積み重ねることであろう。

〔注〕

(1) 白老のアイヌ民族博物館が所蔵する音声資料に、平取町伝承の onne paskur がある（テープ番号34671）。今回は原文資料を聞くのが間に合わなかった。

(2) 日本放送協会には他に部内資料用として、1967『アイヌの音楽』があり、資料9とほぼ同じ内容である。

(3) 萩中美枝（一九八二）「知里幸恵ノートに関する覚え書き」『昭和56年度アイヌ民俗文化財調査報告書（口承文芸シリーズⅠ）』北海道教育委員会

(4) 資料4は誤植が多いので、筆者は本文については原文ノートを用いて比較している。原文ノートは旭川市博物館に収蔵されている。

(5) 採録者の中川裕氏のご教授により、筆者が推測している。

(6) 萱野茂（一九七八）『アイヌの民具』すずさわ書店

(7) 佐々木長左衛門（一九二二）『アイヌの話』佐々木豊榮堂

(8) 知里真志保（一九六〇）『アイヌの民話と唄』北海道豆本の会にも同様の説明がある。

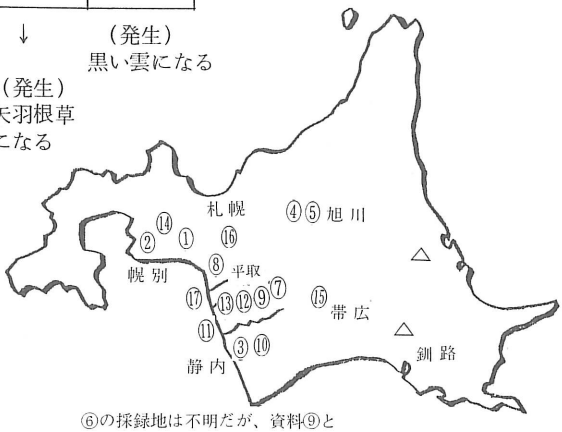
(9) 中川裕（一九九〇）「アイヌ語の歴史」『アイヌ文化に学ぶ』札幌学院大学人文学部編

(10) 知里真志保（一九五四）「アイヌの神謡（一）」（一九七三『知里真志保著作集』第1巻所収）

（おおたに・よういち／アイヌ民族文化研究センター）

表1　onne paskur のヴァリエイション

| 資料番号 | 4 | 13 | 9 | 15 | 10 | 11 | 16 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 伝承地 | 登別？ | 平取 | 平取 | 清水？ | 静内 | 門別 | 千歳 |
| 1 | カラス | カラス | カラス | カラス | 麹・カラス | カラス | カラス |
| 2 | 麹 | 俵 | 俵 | 俵 | | 俵 | 俵 |
| 3 | 酒 | 酒 | 酒 | 酒 | 酒 | 酒 | （消滅）こぼれてなくなる |
| 4 | 飲む a=ku | 飲む a=ku | 飲む a=ku | 飲む a=ku | 飲む an=ku | 飲む ci=ku | |
| 5 | ウンコ | ウンコ | ウンコ | 小便 | ウンコ | ウンコ | |
| 6 | 犬 | 犬 | 犬 | 犬 | 犬 | 犬 | |
| 7 | 殺す a=rayke | 殺す a=rayke | 殺す a=rayke | 殺す a=ronnu | 殺す an=ronnu | キツネ cironnup | |
| 8 | カラス | カラス | カラス | カラス | 弓矢 | （消滅）山津波に流される | |
| 9 | 殺す | 殺す | 殺す | 殺す | 射る | | |
| 10 | 矢 | 矢 | 矢 | 矢 | （発生）福寿草になる | | |
| 11 | 木 | 射る | 射る | 射る | | | |
| 12 | 射る | 苔 | ↓ | （発生）黒い雲になる | | | |
| 13 | 伐採 | 舟 | （発生）矢羽根草になる | | | | |
| 14 | 薪 | 交易 | | | | | |
| 15 | 消し炭 | （消滅）嵐で沈む | | | | | |
| 16 | 灰 | | | | | | |
| 17 | 捨てる | | | | | | |
| 18 | 苔 | | | | | | |
| 19 | 舟 | | | | | | |
| | （消滅）見えなくなる | | | | | | |




⑥の採録地は不明だが、資料⑨とほぼ同じあらすじと方言である。

図1　onne paskur の採録地